

## 2017/18 シーズンのインフルエンザの動向について

国立感染症研究所感染症疫学センター 大石 和徳

2017/18 シーズンのインフルエンザの流行は 2017 年第 47 週に全国レベルの流行開始の指標であるインフルエンザ定点当たりインフルエンザ患者報告数が 1.0 人/週を上回りました。第 51 週にはインフルエンザ定点当たり報告数が 10 を越え、2018 年第 2 週からインフルエンザ定点当たり報告数は急速に増加し、2018 年第 5 週には 54.33 と 1999 年 4 月以降最高となりました。

今季のインフルエンザウイルスは、2017 年内に流行開始時には A(H1) 亜型が主体でありましたが、その後急速に B 型が増加しました。B 型では山形系統が主体です。また、2018 年 2～5 週には A 型では A(H3) 亜型が A(H1) 亜型を上回り優勢となりました。2018 年に入ってからでは B 型 > A(H3) 亜型 > A(H1) 亜型の順となりました。近年は、A(H3) 亜型もしくは A(H1) 亜型が 1 年間隔で流行の主体となってきましたが、B 型が流行の主体となったのは、2004/05 シーズン以来のことです。また、今季の流行が近年にない大きな流行規模になった理由については明らかではありませんが、今シーズンと同様に B 型が主流であった 2004/05 シーズンには、2005 年第 9 週に定点当たり報告数が 50.07 となり、今シーズンと同様に大きな流行規模のシーズンでした。

定点医療機関からの報告をもとに、定点以外を含む全国の医療機関を受診した患者数を推計すると、2018 年第 3 週は約 283 万人（95%信頼区間：266～300 万人）となり、今シーズン最多の週当たり推計受診者数となりました。また、2017 年第 36 週～2018 年第 3 週の今シーズンのこれまでの累積の推計受診者数は約 837 万人となり、年齢別では、15 歳未満が 39%、30～40 代が 21%、70 歳以上が 8%と推計されています。

全国約 500 カ所の基幹定点医療機関からのインフルエンザによる入院患者数（インフルエンザ入院サーベイランス）においては、2018 年第 3 週までに今シーズンのこれまでの累積入院患者数は 7,682 例となっています。2017 年第 36 週～2018 年第 3 週の年齢別の内訳は、15 歳未満が 2,314 例（30%）、70 歳以上の高齢者が 3,752 例（49%）と、高齢者が多くなっています。

インフルエンザ定点当たり報告数は 2018 年第 6 週以降に急速に減少し、第 8 週では 22.64 まで低下しています。しかしながら、現時点でもインフルエンザ流行期にありますので、感染予防策の継続が必要です。

インフルエンザの感染予防策としては、接触感染対策としての手洗い等の手指衛生を徹底すること、飛沫感染対策としての咳エチケット（有症者自身がマスクを着用し、咳をする際にはティッシュやハンカチで口を覆う等の対応を行うこと）が重要です。高齢者における感染への警戒の観点から、医療・福祉施設へのウイルスの持ち込みを防ぐために、関係者が個人で出来る予防策を徹底すると同時に、訪問者等においては、インフルエンザの症状が認められる場合は訪問を自粛してもらう等の工夫が重要です。

2018 年 3 月 15 日

日本病院会 感染症対策委員会 委員長 岩田 敏  
副委員長 大久保憲  
委員 一山 智  
委員 大石和徳  
委員 大曲貴夫  
委員 洪 愛子